研究

徳山地方の幕末維新期に活躍した群像たち（その四）

―山崎隊を中心に（前編）―

会員　小林省三

はじめに

幕末維新期は、一九世紀後半に久しきにわたった徳川幕府封建制支配を倒壊せしめ、近代天皇制国家へと移行する一大変革の期間であった。

これまでに、日本開国の引金となった嘉永六年（一八五三）六月三日のペリー来航時から徳山藩内訌事件後、慶応元年（一八六五）六月一七日から一八日の革新（倒幕）派が徳山藩政治の要路に立った段階までの諸事件とそれに関係した群像たち数名について本誌第二三・二四・二五号で報告した。　平成一五年四月二一日に徳山市・新南陽市・熊毛町・鹿野町の二市・二町が合併して、周南市が誕生した。

慶応元年六月に徳山藩で革新（倒幕）派が政治の要路に就いた頃、合併して周南市の一部となった旧新南陽市の富田で、士庶の有志により徳山藩最初の諸隊である山崎隊が結成された。

本稿では未だ十分な調査ができていないが、徳山藩内の中心的軍団の一つとして幕末維新期に活躍した山崎隊について現在明らかになった部分を前編と後編に分けて本誌二六号と二七号で紹介する。

一、山崎隊の誕生

山崎隊は慶応元年四月一四日に富田村の庄屋である政

所の岩崎庄左衛門を賄方として富田隊という隊名で結成された。翌一五日には隊名を山崎隊と改称し、小銃五〇挺、刀五〇腰などが徳山藩から貸し渡され、陣営として富田村新町の浄真寺があてられた。山崎隊結成時の状況は次の史料で知ることができる。

史料1（註①）

【御蔵本日記】徳山毛利文庫所蔵

（慶応元）四月十四日昼より晴

一御代官所江左之通　　政所

岩崎庄左衛門

右此度富田隊御取興ニ付、其向賄方申付候間此段相心得相勤候様被申付候事

一御紋付御幕壱　一小銃五拾挺　一御貸刀五拾腰（右御武具方へ証手紙）一御紋付提灯弐張（右御蔵本之分）

右前同文ニ付、其向より乞掛次第貸渡候様夫々遂沙汰候事

四月十五日晴

一今日より富田新町浄真寺江隊御取興ニ付左之通

一合薬壱貫八百目　一玉六百　一町夫四人

一組付壱人才料組触　一荒仕子壱人

右之通夫々遂沙汰今朝差越候事

一富田浄真寺江御立被成候隊名山崎隊と名付相成候事

また、山崎隊都合方に対して徳山藩御蔵本から一か月の経費として白米十石二斗六升、銀三貫八百匁余が支給された。このことは次の史料で知ることができる。

史料2（註②）

【大令録】同　上

覚

一米拾石四斗六升五合弐勺　白米拾石弐斗六升

一銀壱貫弐拾匁　丁銭百五十三貫九百目

（中略）

一銀壱貫三百六十八匁　金拾九両

但隊之者三拾八人月俸人別金弐歩宛

一銀百八匁　金壱両弐歩

内壱両雇込小使弐人、弐歩雇込別当壱人

一銀百八匁　金壱両弐歩
　但諸隊之内并諸処より来客之節賄料引当
一銀三百六拾目　金五両
　但器械方并御賄方諸道具類損仕替、并御入用物
　御買入其外共月並銀之分
一銀弐百四十弐匁四分三厘三毛　萩札弐百五拾三匁
　壱分内四拾八匁粉糖壱石四斗、六拾匁飼葉三十
　貫目、拾五匁弐分　但沓并敷藁其外飼料方入用
　之分、七拾三匁五分　但大束代、尤壱ケ月風呂
　木并馬之湯沸し薪其外とも、五拾六匁四分但暑
　寒平均ニして炭代毎月之分
　米拾石弐斗六升
　合
　銀三貫八百六匁四分四厘三毛
右之通山崎隊御賄其外とも諸御入目壱ケ月前書之通
御定被仰付候条、諸事遂吟味御定通ニ而相済候様、
尤油蠟燭筆紙墨等之儀は当分之内是迄通現入用及仕
払候様、旁御沙汰可被成との御事

（慶応元）
乙丑閏五月朔日　　御蔵本
　　山崎隊
　　御都合方

隊員には、一か年に米一俵宛給与、技芸優秀なものには、入隊中苗字帯刀御免という特典が与えられた。

また、洋式の銃砲制が採用され、仏国式一二拇砲二門と小銃はミネール銃が装備された。このことは次の史料で知ることができる。

史料3（註③）

獻功隊山崎隊史

山崎隊は慶応元年に成立し隊員は初め百人内外なり後ち二百人内外に増加し四民より募集したるなり砲二門佛國式十二拇砲を有し小銃はミネール銃にて最初の総督は大野直輔なりき（後略）

当然のことであるが、従来行なわれていた中島流の砲術や騎射は廃せられた。

山崎隊は、文久三年（一八六三）六月七日に結成された萩藩の奇兵隊、文久三年八月に結成され、後に長府藩

の報国隊に編入された精兵隊、慶応元年三月に結成された清末藩の育英隊など各藩の諸隊に比して、一番遅く結成された隊である。このように、徳山藩での諸隊の結成が遅れた原因は、徳山藩では保守（恭順）派の政治の要路からの退陣が最も遅れたためといわれている。（註④）

二、山崎隊の構成

(1) 組織

慶応元年四月一五日に大野丹下が山崎隊総督に任ぜられたが、同年四月二四日には御繰合筋を以て山崎隊総督を免ぜられて、大野丹下は長浜主税とともに山崎隊総管に任ぜられた。また、同日山岡登人が山崎隊軍監に任ぜられた。（註⑤）初期の山崎隊の組織は、次の史料で知ることができる。

史料4（註⑥）

【大令録】同　上

覚

（前略）

一省略

但惣人数五拾七人、壱人日別白米六合、菜代九拾文宛ニして右之辻

惣管弐人　軍監壱人　器械方弐人　応接方弐人稽古取立方三人　兵士三拾八人　別当壱人　小使弐人荒仕子弐人　雇夫四人（藤井幸太郎　福田常右衛門原田善右衛門　石田順作）（中略）

乙丑（慶応元）閏五月朔日　御蔵本

山崎隊

御都合方

山崎隊は慶応元年六月二〇日には、陣営を徳山村徳応寺に移した。そして同年九月一七日には、次の史料ような新しい「役付覚」が当時の山崎隊惣管遠藤四郎と有福愷太郎に令達された。

史料5（註⑦）

【大令録】同　上

役付覚

一百人ニ而

総管壱人軍監壱人書記弐人斥候弐人隊長弐人押

伍弐人、以上拾人

右之通人数ニ応し士官数相定候、尤役付大概被定置候事ニ付、定限之内を以於隊中他官へ繰合之義は不苦候事

右之通被仰付候、以上

乙丑九月十七日

この史料から、山崎隊の隊員百人あたりの基本的な士官数を知ることができる。山崎隊の隊員定員数は、慶応四年（一八六八）三月二三日に二百三十人に定められたことが次の史料で知ることができる。

史料6（註⑧）

【大令録】同　上

覚

山　崎　隊

右此度御詮議振有之、八拾人増兵都合弐百三拾人ニ被仰付候間、兵律厳粛実地之御用ニ相立候様取立方可有之候事

右之通被仰付候、已上

慶応四年戊辰三月廿三日

山崎隊はおよそ五〇人の隊員で発足したが、隊員定員数はその後漸次増加し、慶応四年三月二三日以前には一五〇人前後の定員であったと思われる。（註⑨）

慶応元年一〇月一四日には、滝弥太郎が山崎隊総管に任ぜられた。このことは次の史料で知ることができる。

史料7（註⑩）

【御用状控】

十月十四日

滝弥太郎御軍政御用掛仰付等の事

一山口同僚中より十月十四日之書状を以藤田与次右衛門ぇ

（中略）

滝　弥太郎

右御用有之、日々政事堂出勤仕候様被仰付置候処被差除、御軍政御用掛り被仰付候事

同　人

右当分現勤被差除、徳山山崎隊総管被仰付候事

右同日筑前殿被仰渡之
右之通追々御沙汰相成候間、御当役方被仰上候様ニ
と存候由
御面書之趣致承知、御当役方え申達候、以上
十月廿日

(2) 隊員構成

山崎隊は、士庶を問わず志気旺盛にして技芸優秀な有志のものによって結成された。諸士は総管など役付を命じられた者の他は、原則として当主・嫡子で根役を持つものは入隊を禁止され、庶民（百姓・町民）は家業が続けられるように、跡を立てた場合に入隊を許された。このことは次の史料で知ることができる。

史料8（註⑪）

【大令録】同　上

覚

一此度山崎隊人数定被仰付候ニ付、志気芸術精選之上ニ而入隊仕らせ過不足無之様取立被仰付候、縦ひ往々及不足候共勝手ニ入隊仕らせす、第六条之心得を以其節申出候様被仰付候、（以下略）

一諸士本人嫡子根役有之面々ハ勿論、其外ニ而も本人之義入隊被差留候、尤総管其外役付御沙汰を以被仰付候面々ハ格別、役付之外たり共嫡子次三男願出之上入隊被差免候事

一百姓町人之義は農作商売等取続候者跡へ立置、入隊相望候ハハ可被差免候、其外家子等捨置逃去、百姓軒町屋之潰れにも立至り候者之義ハ厳重ニ逐返候様被仰付候、尤是迄隊入仕居、狙撃等之業熟達せしめ志気も有之者義ハ御詮議之上、何分之御沙汰可被仰付候事（以下略）

慶応元年乙丑九月十七日

右白片折竪へ認候御用印突之、山崎隊惣管遠表藤四郎有福愷太郎へ被仰渡候事

山崎隊に旧新南陽市域内の徳山藩領諸村から五九人の農町民が入隊した。これを村別にまとめると、表1となる。この表は「出身村別表」である。これでみる

表1　出身村別表

村名	人数
富田村	9
古市町	3
新町	4
平野町	4
福川村	14
福川町	24
上村	1
計	59

と各村からまんべんなく入隊しているが、福川地区の入隊者が多いことが分かる。

また、町方が三五人に対して地方が二四人となっているが、両地区の戸数・人口比を考慮すれば、ほぼ同程度の入隊率となるのではなかろうか。

次に、資料（註⑫）では伜と記述されている者を長男とみなして長男と次三男他の割合を調査したところ表2の「長男・次三男他別表」のようになった。地方出身兵二四人中、長男は四人で、次三男他は一八人と四倍以上の多さである。それに比して町方出身兵は、長男と次三男他とがほとんど同数である。このことは、地方の次三男他は、新しい軍隊に応募入隊することにより、そこに自分の将来への展望を求めたのではないだろうか。

表2　長男・次三男別他表

	人員	長男	次三男	不明
地方	24	4	18	2
町方	35	16	17	2
計	59	20	35	4

出身階層は僧職一人の他は農民と商人であり、農民と商人が圧倒的に多いことが分かる。

下松市域内の徳山領諸村（大藤谷村・温見村・瀬戸村・山田村・生野屋村・河内村・東豊井村・西豊井村・豊井村・下松町・下松浦）からもまんべんなく数人が山崎隊に入隊していて全体で五五人となっている。その出身地別の内訳は、町方二〇人に対して地方は三五人であり、長男と次三男の割合は地方出身兵は二五人中長男は一一人であり、次三男は一九人と倍近く多い。それに比して町方出身兵は、長男が次三男より五人

多い。このように地方と町方出身兵の長男と次三男との割合傾向は、旧新南陽市域内と同じである。出身階層は、神職二人と下士一人を除く五二人が農民と商人で九五パーセントに達し、圧倒的に多いのは旧新南陽市域内と同様であった。また、下松市域内出身兵は、年齢別では一〇代、二二人・二〇代、三〇人・三〇代、一人・不明二人であり、最年少は一三歳の少年から、最高年齢は三〇歳であり、平均年齢は一九歳であった。（註⑬）

以上が山崎隊の旧新南陽市域内と下松市域内出身兵の分析であるが、旧徳山市域内では、出身階層に徳山藩士が加わり、旧新南陽・下松市域とは少し異なる傾向を示している。それは藩士の構成比率が高いことである。藩士の入隊者は二八人であるのに対し、旧徳山市域内の徳山藩領の諸村（徳山舞車・幸町・野上町・辻村・浦石・西町・東浜崎・今宿・一の井手・遠石町・栗屋村・譲羽村・夜市村・四熊村・上村・矢地町・須磨村・大津島・大島居守）からまんべんなく山崎隊に入隊していて全体で五〇人となっている。

その出身階層は、神職二人・僧職一人の他は農民と商人であり、藩士入隊者は旧徳山市域内出身兵の三六パーセントに達している。（註⑭）

しかし、山崎隊員全員に対する藩士の構成比率は、一六パーセント程度であり、山崎隊は農民と商人が多い構成であったこと分かる。

山崎隊全隊員の長男と次三男他との割合は、長男が七〇人に対し、次三男他が九九人で次三男他は長男の一・四倍程度であった。

山崎隊全隊員の年齢別構成は、一〇代、七八人・二〇代、九六人・三〇代、二人・四〇代、一人・不明、一二人であり、最年少は一三歳の少年であり、最高年齢は四五歳であった。（註⑮）

(3) 合併

慶応二年（一八六六）二月二日に徳山表の警備応援のため、集義隊と荻野隊は徳山に出陣を命ぜられ、山崎隊と三隊で合併すること仰せつけられた。この合併隊を斉

武軍と唱えた。(註⑯)この斉武軍の指揮は徳山藩世子毛利元功に依頼された。

このことは次の史料で知ることができる。

史料9(註⑰)

【諸隊沙汰控】

二月(日不詳)

毛利平六郎へ徳山方諸兵一手指揮申込の事

覚

此度御本家様深キ御思召被為在、集義隊・荻野隊・山崎隊合併にして平六郎殿被致指揮候様御達之趣、淡路殿・平六郎殿え申達候処、被為懸御心頭候段深難有被奉存候、然処平六郎殿ニも日増壮年ニ被差向候、旁ニ付ては軍旅之義は別て平六郎殿より被添心、山崎隊而已ならす徳山方諸兵一統之指揮被致度、孰も期望罷在候ニ付、山崎隊総督として夫のミ専ら指揮之姿と相成候ハハ、士気作興之所至却て難被行届、衆心相馳可申哉と深く懸念被致候、此上押て申出候は被恐入候儀ニ御座候得共、佐々木次郎四郎儀、副督被差出候御人柄ニ付、徳山方え御所望被致度、乍併当節集義隊引請被差出置候付、何卒別段相当之人壱人御所望被相願、山崎隊総督被申付度被存候、左候得は平六郎殿ニは淡路殿一同徳山方諸兵一統之指揮被相束、尚又集義・荻野二隊とも御応援被下候ハハ、臨機応変駆引平六郎殿所被希ニ御座候、折角難有御差引被仰付候ニ付、此上前条通歎願被仕度、此段入々申込仕候様淡路殿被申付候事

二月

また同年二月一八日には、予て都濃郡宰判諸兵軍監であった楢崎八十槌が斉武軍の軍監を兼務した。二一日には斉武軍は富田の善崇寺に転陣屯集した。このことは次の諸史料で知ることができる。

史料10(註⑱)

【諸隊沙汰控】

二月十八日

楢崎八十槌合併三隊軍監兼帯仰付の事

集義隊・荻野隊之儀、山崎隊と三隊合併被仰付、山

崎隊同様、平六郎様え御指揮被成御頼候処、楢崎八十槌事、兼て都濃郡宰判諸兵軍監被仰付置候付、右三隊之軍監をも相兼所勤被仰付候事

史料11（註⑲）

【諸隊沙汰控】

集義隊・荻野隊・山崎隊富田善崇寺へ転陣仰付の事

覚

本書申出之通、富田え転陣被仰付候事

今般集・荻、徳山表為応援被差出、山崎合併、一隊之心得を以申合、規律相立候様被仰付候付、此回長穂龍文寺を根居之心得にて、富田善崇寺え三隊転陣屯集被仰付候様御沙汰可被下候、以上

二月　　集義隊

荻野隊

同年五月七日には、斉武軍の「日課并規則」が定められている。（註⑳）

斉武軍は四境戦争後に解隊し、各隊は各々独立して戊辰戦争等で活躍した。

おわりに

本稿では山崎隊誕生の地、旧新南陽市（富田）も加わった周南市の発足に際し、幕末維新期に徳山藩内の中心的軍団の一つとして活躍した山崎隊についての調査分析の結果を報告した。しかし本号には、与えられた紙幅の関係で、山崎隊誕生の経緯と山崎隊の構成（組織・隊員構成の分析など）および四境戦争前の山崎隊など三隊の合併事情など、この度の調査分析結果の前半部分を投稿した。次号には、山崎隊の戦歴を中心に調査分析を行った後半部分を投稿したい。また機会があればこれら投稿した山崎隊の調査分析結果を徳山地方郷土史研究会の例会で研究発表したい。

今後も「旧徳山地方の幕末維新期に活躍した群像たち」について新しい視点でもって調査検討を進めていきたい。

註

① 徳山市史編集委員会編
『徳山市史史料　中』　一六六頁

② 右①に同じ　一六七頁

③ 兼崎茂樹編『橙堂遺稿補遺』　三三〇頁

④ 『徳山地方郷土史研究』第二五号二八～二九頁

⑤ 徳山市史編集委員会編
『徳山市史史料　中』　一六四～一六五頁

⑥ 右⑤に同じ　一六七頁

⑦ 右⑤に同じ　一七〇頁

⑧ 右⑤に同じ　一七二頁

⑨ 山崎隊の隊員数については諸説あり、『橙堂遺稿補遺』と『都濃郡誌』では、初めに百人内外後に二百人内外としている。

⑩ 山口県編集発行
『山口県史　史料編　幕末維新6』四九二頁

⑪ 徳山市史編集委員会編
『徳山市史史料　中』　一六九頁

⑫⑬⑭⑮ 徳山市立図書館叢書　第十六集
『山崎隊人名録』　一～二三頁

⑯ 『徳山地方郷土史研究』第二三号　三八頁

⑰ 山口県編集発行
『山口県史　史料編　幕末維新6』五一三頁

⑱ 右⑰に同じ　五一二頁

⑲ 右⑰に同じ　五一五頁

⑳ 右⑰に同じ　五六四～五六六頁